The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラコルデール : 『ノートルダムでの講話』(1835-1836) のレトリック
Author(s)	岡田, 純子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2001, 35, p. 105-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47877
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラコルデール：『ノートルダムでの講話』(1835-1836)のレトリック

岡田純子

レトリック「修辞」といえば、空疎な内容でも効果的に伝える詭弁というコノテーションが強い。これは現在に始まったことではなく、プラトンも『ゴルギアス』の中で同じ批判をしている。1) しかし、キケロ、テルチュリアヌスの伝統を汲む古典的なレトリックの概念では、決して表面上の言葉遊びを指すのではなかった。レトリックとは真理をいかなる言葉の輝きでもって相手に伝え、説得し、納得させるかを目的として体系づけられていったものだ。技術的にはinventio（発想）、dispositio（配置）、elocutio（言論）、memoria（記憶）、actio（動作）の五部門に分けられていた。政治、司法の分野での演説においてはmemoria-actioが聞き手を説得させるためには重要とされたが、文学作品に関してはinventio-dispositio-elocutioまでが対象となり、またフォンタニエの *Les Figures du Discours* (1821-1830) 出版以降、レトリックは次第にelocutioの代名詞と化していった。

古典的レトリックを十全な形で体現していたのが演説である。そしてフランス大革命時には多くの革命家たちが熱弁を奮い、ミラボー、ロベスピエールなどはそれぞれ個性ある弁論で注目された。しかし雄弁であったのは政治家だけではない。1835年からパリノートルダム寺院で始まった講話を担当した聖職者アンリ・ラコルデール(1802-1861)も、一度に6000人もの聴衆がつめかける大成功を収める当時傑出した雄弁家であった。2)

教皇庁から極左的とみなされ糾弾されたラムネーのカトリック復興活動に参加したことで、カトリックの中で微妙な立場にあったラコルデールがノートルダムでの四殉節の講話を担当することになったのは、1834年にコレージュ・スタニスラスで行われた講話の成功による。これで彼は自分の天職を見つけたという。[3] そしてラコルデールは1835年から最終的には1851年までパリノートルダム寺院において計73回にわたる講話を行い、本人が加筆修正を加えて出版したのが『ノートルダムでの講話』である。

キリスト教信者に向かって神や信仰について説く説教 sermon と違って、講話 conférence という形態は、不信仰者の反論に答えるのが目的で、一連の講義形式を取り、1803年サン・シュルピス教会でフレシヌ神父がすでに先陣を付けていた。大革命後宗教弾圧が起こり、既存の価値観が崩壊する中、それに反発するかのごとく台頭したラムネーの活動が劇的な末路を辿り、その間サンシモニスム、フーリエリスムなどの宗教的色彩を帯びた社会主義的試みがなされるなど社会情勢と共に精神性においても不安定な状況にあった。そのような時代背景の中、宣教 prédication しようという目的から、一般大衆に開かれた、教会で行われる講演であったとはいえ、聴衆の興味にまかせた演説ではなく、また純粋な講義でもなく、宣教の一つの形であるので、ここでは conférence を講演ではなく、講話と呼ぶことにしたい。

ラコルデールの容貌、表情、声の抑揚、身ぶりなどが聴衆に強い印象を与えたことは当時の多くの人の証言にも見られ、[4] 彼の演説にあって memoria、actio の重要性は否定できないが、書かれたものしか残っていない現在、それらを含めたラコルデールのレトリックの全体像を再現することはできない。しかし、講話のために入念な準備もなされていたことから、実際には即興部分もあったものの単なるおしゃべりではなかったことは明らかである。[5] 本稿では、彼の評判を決定的にしたノートルダムでの講

話の当初の二年間に着目し、書物ではなく言葉という媒体を通すことによって、書かれたものとの elocutio の違いから彼の discours を分析し、なぜ当時大成功を見たのか、そこにはどのようなラコルデールの思想が反映されているのかをラコルデール本人の素養のあった古典的レトリック6)を根底において考えたい。

1）聴衆

書物と演説の第一の違いは聴衆の有無である。書物は読者が全く見えないのに対して、演説は聴衆と直接相対することになる。書物にしても演説にしてもそれぞれの主題に合った文体が要求される。特に演説においては書物よりも対象となるメッセージの受け手が限定されてくる。『ノートルダムでの講話』の聴衆はどのような層だったのか。

ノートルダムでの講話に先立つスタニスラスでの講話に出席していた聴衆は、医学生、法学生、ポリテクニックを始めとする学生、さらには当時は大学生であったカトリック活動家で1997年には福者に叙されたフレデリック・オザナン、詩人のモーリス・ド・ゲラン、ラマルチーヌ、シャトーブリアン、ユゴー、弁護士ベリエ、政治家オディロン・バロなどの名があげられる。7)

講話の中ではラコルデールが聴衆に関して言及をしている。第1回の講話で、聴衆は年輩者から若者にわたっており、一様でない様子が描写されている。しかし一連の講話では聴衆に対して様々な呼び方 pronomination 8) を行っている。まずは « jeunes »「若い」という形容が多い。さらには « enfants du siècle »「時代の申し子」(1835年第2回、p.44)、« élite de ce siècle »「今世紀のエリート」(1835年第7回、p.126)、« fils du dix-huitième siècle »「18世紀の申し子」(1836年第9回、p.173)、« princes de la civilisation industrielle »「産業文明のプリンス」(1836年

第10回、p.193)などという定義づけが見られる。講話に女性も数多くいたというが、[9] これらのpronominationを見ても、またラコルデールが聴衆に呼びかける時は常に« Messieurs »「紳士諸君」であることからも、対象をまず男性においていたことがわかる。

次に時代の子としての若者たちを具体的には、「ラテン、ギリシア語を学び、物理学と数学の知識があり、古代史現代史の断片を読み、反キリスト教の弁論を興じてページをくり、20歳から25歳のうちにイエス・キリストと教会を人間理性から追放してしまった」(1836年第11回、pp.212-213)青年達と捉えていた。現実には、スタニスラスでの常連を始めとする当時の知識層、文人がこぞって参加していたという。[10]

1835年1月にこの講話の開催が決定し、あまり準備期間がなかった1835年の7回分の講話も、1835年の6月から翌年の四殉節の講話の準備を始めた1836年の6回の講話においても、vous「皆さん」という語りかけ、あるいはこの人称代名詞またはvotre、vosなどの所有形容詞二人称複数形が頻出している。それはラコルデールが常に聴衆を意識して話しを進めていたことを示す。エミール・ヴァアストが« Il ne parle pas devant l'assemblée, il lui parle »「彼は聴衆を前に語るのではない。聴衆と話しているのだ」[11] と指摘するとおり、そのvousの使用は単に呼びかけているだけではない。ではこのvousがどのように使われているのかを検証していこう。

2）vousの使用

譬え話を挿入する際も、ラコルデールは会話部分に直接話法を多く取り込んでいる。世間で若者や老齢の医師が身体の中に魂のありかがわかれば魂を信じるという理屈を耳にすることがあるということに対して、彼はこう続ける。

On peut répondre : Vous croyez donc aux corps, parce que vous en avez vu ? Eh bien, je vous annonce une triste, une déplorable nouvelle, c'est que vous n'en avez jamais vu ! Qu'avez-vous vu, en effet, dans ce que vous nommez un corps ? [...] mais la substance, ce qui est là-dessous, je vous dis que vous ne l'avez pas vue. [...] Et cependant vous croyez à l'existence des corps, vous y croyez fermement, et vous faites bien, parce que vous avez dans les phénomènes des raisons suffisantes d'y croire. Mais c'est une foi [...]. (1836年第12回、pp.222-223)

Discours の中でこの vous は直接的に聴衆を指すものではなく、譬えの中に設定された懐疑的な見解を持つ人々に向けられている。しかしその dialoguisme が actio にも優れたラコルデールの口から発せられた際には、質問の形を取りながらも実際は問いかけているのではなく、反対意見を持っている相手により大きな説得力を持って納得させるためのフィギュールである interrogation などによって生き生きとした情景が描き出され、実質としては本人ではなくとも、空間的には vous として現前している聴衆にはその世界に浸透する要因と成り得ただろう。また不可視のものを信じないというのは当時の反宗教の見解であり、それに反駁しているとすれば、恐らくその意見を持った聴衆には、すでに直接的な解答として受け止められたのではないか。こうして vous は二重の効果を生み出すことになる。

Vous の使用はもちろん dialoguisme にとどまることはない。大部分は直接聴衆を指している。

Vous direz, peut-être, qu'il est difficile de passer de la vérité inférieure à la vérité supérieure. Mais d'où vient cette difficulté, sinon de nous-mêmes, sinon parce que nous ne pratiquons pas la

vérité au degré où elle nous est connue ? Quoi ! vous voulez que Dieu vous éclaire davantage, et vous n'accomplissez pas même les devoirs que vous impose une lumière moins grande ! Vous demandez une montagne, et vous ne pouvez pas porter un grain de sable ! Ecoutez l'oracle divin [...]. (1835年第5回、pp.100-101)

ここではまずvousの反論を予想しそれに反論をするoccupationから始まり、続いても直接断定的に答えるのではなく、上述したようなinterrogationの形をとり、それは同時に意見を押し付けるのではなく相手が自発的に自分の意見に賛同するように導こうとするcommunicationと呼ばれるフィギュールでもある。さらにvousの意見を想定したoccupationが連続する。これらはフォンタニエが「論証による思想のフィギュール」に分類している文彩である。Occupationを多用したこの文体は講話を通して頻繁に現れるが、ラコルデールの友人モンタランベールによれば、準備された反論が、予測される攻撃を完璧に覆していたわけでなく、この方法はしばしば聴衆達を心配させまた失望させたという。[12] つまり彼が好んで使用したわりには実際の効果はあげられていなかったということになる。ラコルデール研究第一人者であるアンドレ・デュヴァルはそこに「弁護士」としてのスタイルを見ている。[13] 確かにラコルデールは弁護士の研修を受けており、彼の弁論家の基礎づくりはそこにあった。聖職者になっても法廷闘争の際は、必ず弁護士をつけず自分で自分の弁護を担当した。[14] ましてこの講話は無神論者達に対するカトリックの擁護である。弁護士としての意識は十分に働いていたに違いない。しかし一方で、このフィギュールは論理的に理性を説得させる手法である。すなわち、ラコルデールの意図するところは、啓蒙思想の教育を受けた知識階級に対して理性を説得することにあった。

3）理性

第１回目の導入部でラコルデールは、まず人間とは自発的に知識を持っているものではなく、「教えられる存在」であることを示し、聴衆に次のように語りかけた。

> Assemblée, assemblée, dites-moi : Que me demandez-vous ? Que voulez-vous de moi? La vérité? Vous ne l'avez donc pas en vous, vous la cherchez donc, vous voulez la recevoir, vous êtes venus ici pour être enseignés. (1835年第１回、p.14)

この講話が当時の聴衆を驚かせたのは、まず伝統的な擁護論のdispositioを覆したことにある。従来であれば啓示の必要性を確立したあと、キリスト教の啓示の歴史を確認するのに対して、ラコルデールは実際に存在し、反駁の余地なき事実fait、つまり人間という存在を再確認させることから始め、次には教会の意義、歴史を提示した。1835年の７回を通した講話のテーマはDe l'Eglise「教会について」であり、フォワッセも世相として «Le dix-neuvième, on le sait, n'a pas le goût des abstractions, il demande des faits»「19世紀というのは、周知のように、抽象概念を好まなかった。具体的な事実を求めたのである」と書いている。[15]

しかも、«L'Eglise, en effet, n'est que la société des intelligences avec Dieu par la foi, l'espérance, et la charité»「実際教会は信仰と希望と愛によって、神と共にある知識人の社会にほかならない」(1835年第５回、pp.88-89)とラコルデールは断言する。キリストが貧しい者に福音をもたらすために降臨したという、貧しい者とは «pauvres de l'intelligence» (1835年第１回、p.17)、知性に貧しい者とする。さらに人間にとって最大の貧困とは «l'indigence de la vérité»「真理の貧困」

(1835年第1回、p.17)であり、イエス・キリストは « le libérateur des intelligences »「知性の解放者」(1835年第1回、p.15) であったという解釈を展開する。確かにキリスト教において神は全知全能であるとされており、パウロも « le Seigneur te donnera l'intelligence en tout »「主はお前にすべてにおいて知性をお与えになる」(テモテへの第2の手紙2の7)[16] と述べている。ラコルデールがキリスト中心主義であったことはカレを始め多くの批評家が指摘するが、[17] それでもイエス・キリストの最初のpronominationが、「知性の解放者」というのは意義深い。機能的視点からすれば、イエス・キリストは堕罪にある人類の救済のために降臨したのであり、その実体は三位一体の第三番目のペルソナである。講話にあたってラコルデールはその神学的理解を優先するよりもまず、知性との関連を前面に出すことによって、合理主義者達の偏見を排除することを意識していたと考えられる。さらに啓示なくして成立し得ない信仰については、« la foi est d'abord un acte d'intelligence »「信仰とはまず知性の行為である」(1836年第13回、p.238) とも言う。

そして「信仰」をテーマにした12回目の講話では、信仰には可視である側面と不可視である側面があるとし、前者が現象であり、後者が実体とする。そして不可視である実体を立証するために次のように論証する。「現象は実体を論理的に確証するよう導く。結果が原因に結びついているように、それも現象と結びついているのだ。私には結果の中に原因は見えない。しかし私は論理的に結果から原因を結論づける。同様に私には現象の中に実体は見えないが、論理的に現象から実体を結論づけるのである。」(1836年第12回、p.220) すなわち可視である現象には、合理主義者達は反駁できないこと、そして不可視であっても論理的弁証法であれば、知的聴衆は納得することを念頭においた言説である。さらに、ラコルデールはパウロを引用しながら現象は実体の表出であるとする(1836年第12回、p.221)。

これも上述のような dispositio の逆転で、神が実体であることが大前提となり、様々な現象の説明を展開していく手法とは大きく異なる。

キリスト教の歴史を振り返ってみると、特に旧約聖書の時代は口承であり、神は不可視であって、20世紀の神学者ピエール・アンデスも「知識としての信仰は、パウロのことばによれば『聞くことによる』[ローマ10の17] 知識である。聖書学者たちは聖書の民を聴覚によって特徴づける」と述べている。そしてアンデスはさらに「それに対して聖書の民と同じ時代に生を享けていたギリシア人は、何よりもまず純理論的な知識のシンボルである視覚を、視線を大切にした」と指摘した。[18] また合理主義が権勢を振るった18世紀にいかに視覚が思想の根幹をなしていたかは、ジャン・スタロバンスキーが『自由の創出』において明晰な分析を行っている。[19] 古代ギリシア・ローマの知識と18世紀の啓蒙思想の教育を受けていたのは聴衆であった青年達だけではない。1802年生まれのラコルデールもまた22歳にして回心するまで、幼児期の宗教教育からはかけ離れた教育を受けた、当時33才の18世紀の申し子の一人だった。理論や理性を道具に知性に訴えかけようとするのは、無信仰論者達を説得するための戦略にすぎないとするのはいささか短絡的だろう。[20]

ラコルデールも第9回の講話「伝統について」で、キリスト教の歴史に言及している。そこでも史的出来事は科学的要素では否定できないとして、理性にとって最大の難関である犠牲の理解を、公衆の面前で行われた史的事実としてまず再確認させることから始めている。そして伝統の形式の変遷について次のように定義した。« Jusqu'à Moïse, la tradition est orale ; à Moïse, elle est écrite ; à Jésus-Christ, elle devient sociale. »「モーセまで伝統は口承だった。モーセにおいて記述された。イエス・キリストにおいて社会的になった。」(1835年第5回、p.93) 社会的ということは、空間的時間的に位置していることでありキリストの現実性を強調している。

神の子の受肉はこれまで口承あるいは記述など、ことば、聴覚に由来した不可視の実体であった神が可視の現象となったということである。ラコルデールにとってのキリストの重要性はまさにそこにあるのではないか。この可視／不可視の問題は聖書の中でも信仰に到る時、あるいは信仰において決定的な要素として描かれている。使徒聖トマはイエスが復活したことを聞いただけでは信じず、見て、触らなければ信じないと言い(ヨハネ、20の24—29)、キリスト者を迫害していたパウロはダマスで突然目が見えなくなり神の声が聞こえる（使徒行伝９の１－９）。また聖ヨハネは黙示録に自分が見たという未来の vision を描いた。すなわち可視／不可視の問題はキリスト教原初から課されていた問題であり、ラコルデールにとっても最重要課題だったと思われる。キリスト者と合理主義者の両方の要素を兼ね備えた彼にとって、その可視／不可視の問題を解決するのがイエス・キリストの存在であったのではないか。知的聴衆を対象にラコルデールの取った方法は明証性を追求するあくまで客観的な論法ではなく、また信仰の立場から論理的にキリスト教を学問的に分析解明しようとする神学を展開したのでもなかった。ラコルデールにとってイエス・キリストが視覚的現象であり、神という実体の表出であったからこそ、理性を確証する視覚の解放者、すなわち救世主であったのではないか。そのため第２章の最初に引用した譬えは、vous を活用した聴衆の注目を引き、訴えかけるための手段にとどまらない。そこで問題とされていることは、そこで使用されている単語に顕著に現れている。« vous »「聴衆」、« voir »「見る」、« croire »「信じる」、« la substance »「実体」、« l'existence »「存在」、« les phénomènes »「現象」。まさに視覚、知識、知性と信仰の問題が、聴衆にとって自分に関わりのある具体的なこととして提示されているのである。

4）感性

第2章ではメッセージの受け手としてのvousの用法から、特にelocutioの中でもフィギュールに焦点を当てて、いかにラコルデールが聴衆を意識し説得しようとしていたか、第3章では理性の説得という角度から考察した。ここでは同じvousを使いながらも、譬え話の中の人物としてvousを登場させている例をあげたい。

> Ainsi au bord des mers, quand vous êtes venu accompagner le départ d'un navire qui emporte ceux que vous aimez, longtemps vous le suivez de l'œil ; puis, lorsqu'il échappe aux regards, vous ne quittez point par la pensée ce vaisseau qui n'est plus sous vos yeux, vous savez sous quel ciel il flotte, vers quel port. Et quand la pensée elle-même s'obscurcit, que la carte tombe de vos mains, que le temps s'est écoulé long depuis le départ, que vous ignorez désormais quels vents le poussent et quels écueils l'attendent, votre âme le suit encore par un effort de divination, jusqu'au moment où tout vous manque à la fois, et où vous tombez dans la rêverie, dans le songe, qui est le terme extrême de notre faculté de connaître et de sentir. (1836年第8回、pp.154-155、下線は引用者による)

譬え話は、抽象的な言論による解説ではなく、暗示的に具体的なイメージを提示して説明する目的で聖書でよく用いられているレトリックのひとつである。この手法は伝統的であるが、ラコルデールもまた聖書の伝統に添って、理論的な説明の後に譬えを挿入した。ここは、学問と信仰についての説明の中で、突如として譬えに転換している箇所である。

三人称の人物が複数登場し、直接話法で会話するときに使用されるvousとは違って、ここではそのような登場人物の設定がなく、第2章で例にあげたdialoguismeではない。vousは聴衆を指している。この数行の中にvousが8回、所有形容詞vosが2回、votreが1回と、vousを基軸とする同じ語源の単語を使うフィギュールのdérivationがこのdiscoursを支配している。聴衆はそれまで理性で理解し、論理的な言説を追っていたところが、この圧倒的なvousによって突然物語りの主人公となるのである。その情景は愛する者の船での旅立ちを見送るvous、長い間目でそれを追い、その船が視界から消えて見えなくなったときに、人間の知覚を超えてしまうけれども、知ろうとする思いがそこにまだある。可視である現象から知識を得ようとするのは上述したように理性の行為であるが、その一方で無限を暗示する海と空、航海、夢想と重なるイメージはロマン主義の典型的な題材である。その情景を前にしてvousは主語でありながら、受動的である。Vousが旅立ち、座礁するわけではない。主体となる行為を見ているのである。しかも見えなくなるまで見ている。イメージとは元来視覚的なものであるが、ここで展開する情景もまた視覚的であり、「見る」という行為がそれにからむ。Vousはその情景を視覚で追うのである。そこでは行為を示す「見る」という動詞を使うのではなく、具体的なものを示す «œil»「目」、«regards»「まなざし」を使うことによってさらにvousの固定された動きのない、静的で受動的なイメージを描いている。さらにここではvousがその視覚的情景の中に取り込まれているのだ。ここでのvousは思想的に対立をしている論争相手ではない。また理性に論理的に訴えかけて不可視であるものを立証しようというのでもない。イメージを使って感性に訴えかけるのである。そして船が見えなくなってからの後半部分は、18世紀の思想家たちが思想に光りを与えたということに呼応して、見えないということによる思想の闇が襲い、vousが地図を落と

してしまう出来事すら、地図が動作主として描かれていて、vous は主体性を失ってしまっている。さらに vous は未来について無知になってしまう。それは合理主義者の理想と対極になる。客観的観察、純粋理論では不十分であることを、理性を保証していたはずの知覚の中でも視覚が躓きとなって知らしめているのである。ここはスタロバンスキーが18世紀の思想に関して視覚と理性の限界を結論づけ、19世紀を方向づけているのと符号している。[21] 理性の不完全さによって、見えないことに加えて、波打つ海、見えなくはなっているもののそこに浮かぶはずの船をどこにでも押しやる風、それを待ち受ける暗礁といった人間の力の及ばない自然のモチーフは、さらにもまして漠とした不安が漂う中に vous を投入する。こうしてラコルデールは理性の限界を、感性という理性とは違う角度から説得しようとするのである。またそれだけでなく、この大海原を前にした情景はシャトーブリアンの *Génie du Christianisme*『キリスト教精髄』の中に描かれた海の描写を想起させる。

> Dieu des chrétiens ! c'est surtout dans les eaux de l'abîme, et dans les profondeurs des cieux, que tu as gravé bien fortement les traits de ta toute-puissance ! Des millions d'étoiles rayonnant dans le sombre azur du dôme céleste, la lune au milieu du firmament, une mer sans rivage, l'infini dans le ciel et sur les flots ! Jamais tu ne m'as plus troublé de ta grandeur, que dans ces nuits où, suspendu entre les astres et l'Océan, j'avais l'immensité sur ma tête, et l'immensité sous mes pieds !
>
> Je ne suis rien ; je ne suis qu'un simple solitaire ; j'ai souvent entendu les savants disputer sur le premier Etre, et je ne les ai point compris : mais j'ai toujours remarqué que c'est à la vue

des grandes scènes de la nature, que cet Etre inconnu se manifeste au cœur de l'homme.[22)]

シャトーブリアンは大西洋に船出していく様子を三人称で描写していくのだが、上述のラコルデールの discours にも見られた海、空といった同じモチーフが重なっている。そしてこの後半部分の je はラコルデールの vous で語りかけている文章にまるで呼応しているかのようだ。無限に広がる大自然の光景を前にして、人間の理解を超えたとき第一存在である神が心に姿を現すというのである。ノートルダムでの知的聴衆は1802年に出版されたこの著名な作品を当然読んでいよう。ましてや多少なりともキリスト教に関心があって講話に参加しているはずである。そのような聴衆にとっては、ラコルデールのこの海の描写を含んだ譬えは、シャトーブリアンの詩的キリスト教解釈を想起させたのではないか。フォワッセの伝えるところによると1835年7月にディエップに温泉療養に出かけた際、レカミエ夫人のサロンでシャトーブリアンと会い、彼はラコルデールを「自分のもっとも誉れ高い生徒」であると認めたという。[23)] つまりシャトーブリアン本人が類似性を認識していたということになる。シャトーブリアンの情景描写ほど詩的ではなくとも、その文章を想起させることで、より詩的効果を高めることに成功している。このような感性に訴える discours が挿入されている一方で、そこに掻き立てられた不安、欠如感に絶対的存在の確信を与え、証拠と論証によって論理的、あるいは完全な論理には到っていない形であっても、論争を挑む攻撃的な discours、あるいは強く理性を説得させようとするレトリックが交差し、かえって対比的にそれぞれの特徴が相乗効果を生み出したと思われる。

聴衆は18世紀の申し子とはいえ、ユゴーの『エルナニ』(1830) 以降ロマン主義が台頭していた時代に生きていた。ラコルデールの講話は理性と感

性の狭間でゆれる聴衆にまさに適合したdiscoursであったといえよう。

ラコルデールのパリノートルダムでの講話は、1836年の13回目で一旦中止される。それは聖職者の間から彼の神学的知識の欠陥、誤謬といった批判が高まったからだとされている。しかし、「この講話は神学講座ではない。迷える魂に真理が現れることだ」[24] とラコルデール自身が述べているように、この講話の目的は正確な神学の知識の披瀝ではない。彼が教会の武器であるとするpersuasionを使って、反キリスト教の人々の偏見と反論を粉砕することが第一の目的であった。そのためにメッセージの受け手である聴衆がいかなるvousであるのかを了解し、それに合ったレトリックの選択が重要だったのである。時代の希求していたものに応えたラコルデールの弁説に誤謬や欠点があったことは否めない。しかしそれらの欠点を補って余りある力がラコルデールのdiscoursにはあった。彼が知識階級の聴衆に受け入れられた要因が知識の正確さにないとすれば、人々は理性と感性に彩られた「時代の言葉」を話す彼の言葉のpoétiqueにこそ魅了されたのである。

テキスト

Henri Lacordaire, *Conférences de Notre-Dame de Paris,* t.I, in *Œuvres du R. P. Henri-Dominique Lacordaire de l'Ordre des Frères Prêcheurs,* t.II, Librairie Poussielgue Frères, 7e édition, 1872.

1835年のテーマはDe l'Eglise「教会について」、1836年はDe la doctrine de l'Eglise en général, de sa nature et de ses sources「教会の教義概論、その本質と源泉について」。本稿中での引用には第何回の講話であるか、そしてそのページ数を示した。

注

1) ソクラテスはレトリックはお世辞の一種であり、気に入られるためには真偽のほどは配慮しないと述べている。Platon, *Gorgias,* in *Protagoras*

et autres Dialogues, Garnier-Flammarion, 1967, p.193.

2) Julien Favre, *Lacordaire Orateur,* Librairie Vve Ch. Poussielgue, 1906, p.219参照。

3) André Duval, o. p., *De Stanislas à Notre-Dame,* in *Mémoire dominicaine,* N° 10, Printemps 1997, Cerf, 1997, p.112. Stanislas の講話の延長を当時のパリ大司教 Quelen に嘆願するラコルデールの手紙を引用している。« Les conférences sont le seul ministère possible pour moi [...], en y renonçant, je renoncerais à toute action sacerdotale. Je me connais, je me suis étudié, j'ai fait des expériences, ma vocation n'est que là, je suis entré dans le clergé pour cela ou pour rien. »

4) 多くの文献にラコルデールの外観、動作、声の調子などについての記述があるが、特に L'abbé Marcel, *Chefs-d'œuvre de l'Eloquence française et de la Tribune anglaise, Perisse Frères,* 1843, pp.508-513 に詳しい。

5) Montalembert, *Le Père Lacordaire,* Victor Lecoffre, 1881, p.141にはラコルデールの弁説の即興性が成功の要因であったと認めているが、Christophe Martin, o. p. は *Les Conférences de Notre-Dame en* 1835 *à travers la Correspondance de Lacordaire,* in *Mémoire dominicaine,* N° 10, Printemps 1997, Cerf, pp.139-141に、1835年6月9日に1836年四旬節の講話開催が決定したため、1835年6月24日付の手紙でラコルデールがすでに準備を始めたこと、翌年の講話までそれに専念しようとしていたことを伝えている。

6) 10回目の講話でラコルデールは人類の最高の書として、ホメロス、プラトン、キケロをあげており、雄弁術においてはボシュエを « le prince éternel de l'éloquence »「雄弁術の永遠のプリンス」とし、キケロは « prince des orateurs »「弁論家達のプリンス」(1836年第10回、p.182) であると絶賛している。

7) André Duval, 前掲書、p.116.

8) 本稿ではフィギュールの用語はラコルデールと同時代の Fontanier の *Les Figures du Discours* の分類に従う。

9) Foisset, *La Vie du R. P. Lacordaire,* Librairie Jacques Lecoffre, 1870, t.I, p.329.

10) Laurent Lemoine, o. p., *Les Echos contemporaines des Conférences (1835-1836),* in *Mémoire dominicaine,* N° 10, Printemps 1997,

Cerf, p.157.

11) Emile Vaast, *Lacordaire et les Conférences de Notre-Dame,* Société Française d'Editions Littéraires et Techniques, 1937, p.95.

12) Montalembert, 前掲書、pp.142-143.

13) André Duval、前掲書、p.112.　ここでは直接講話の文体を評しているのではないが、同様の文体について言及している。

14) 法学学士であったラコルデールは聖職に入る前、パリの Alexandre Guillemin のもとで研修生となり1822年11月30日にパリの法廷で弁護士の宣誓を行っている。1831年１月31日の Procès de l'école libre「学校の自由に関する裁判」などにおいて、被告であったラコルデールは自分の弁護を担当し、口頭弁論を行った。これは速記により記録され1831年２月８日付カトリック新聞 *L'Avenir*『未来』に掲載された。

15) Foisset, 前掲書、p.334.

16) 日本語で intelligence を、「理解する力」(日本聖書教会訳、フランシスコ会聖書研究所訳) とあり、バルバロ訳では「力」とはせず、「主はすべてを悟らせ給うだろう」とあり、いずれも「知性」という訳語はつけていないが、ここではラコルデールが1836年第13回 pp.238-239に提示した « L'intelligence est la faculté de recevoir et de combiner des idées » という解釈と照らし合わせ、「知性」とした。

17) A.-M. Carré, o. p. は *La Rencontre avec Jésus-Christ, Lacordaire, Jésus-Christ,* Cerf, 1987 (1960年版の再版) でラコルデールにおけるイエス・キリストの重要性を紹介している。*Dictionnaire de Spiritualité, ascétique et mystique Doctrine et Histoire,* Beauchesne には christocentrisme の中にラコルデールの名があげられている。

18) ピエール・アドネス、『カトリック神学』、渡辺義愛訳、白水社、1993年、第11版、p.24。

19) ジャン・スタロビンスキー、『自由の創出』、小西嘉幸訳、白水社、1999年参照。著者名のカタカナ表記について、訳者小西氏はスタロビンスキーと表記する方が正しいこと、ただし最近はスタロバンスキーで統一される方向にあると付記している。そこで本文中ではスタロバンスキーと記した。

20) Christoph Martin も講話の聴衆が若いパリジャンだったこと、ラコルデール自身がその状況をよく知っていたこと、また自分でもまだ若いと感じていたために彼らにより親近感を感じていたと推測している。Christoph Martin、前掲書、p.136参照。

21) ジャン・スタロビンスキー、前掲書。

22) Chateaubriand, *Génie du Christianisme,* Garnier-Flammarion, 1966, Première partie, Livre cinquième, chapître XII, Deux perspectives de la nature, p.182.

23) Foisset、前掲書、p.360。

24) 1835年4月24日付 Foisset 宛の手紙 « Ces conférences ne sont pas un cours suivi de théologie, le temps me manquerait ; c'est une apparition de la vérité dans des âmes tourmentées. » Laurent Lemoine、前掲書、p.161参照。

(大学院後期課程修了)

Lacordaire : La Rhétorique dans les *Conférences de Notre-Dame de Paris* (1835-1836)

Junko OKADA

Quoique devenu quasiment inconnu de nos jours, Henri Lacordaire (1802-1861) était pourtant l'un des plus grands orateurs du XIXe siècle. Les deux premières années (1835-1836) de *Conférences de Notre-Dame de Paris* relèvent bien la rhétorique de son style oratoire. Lacordaire utilise le mot « vous » surtout comme figure qui vise à convaincre les élites formées selon l'idéologie des Lumières. L'orateur intervertit l'ordre usuel de l'apologétique traditionnelle. Commençant par les faits concrets, il atttache de l'importance à l'intelligence dans la foi avant d'aborder à la révélation. Jésus-Christ pour Lacordaire, « libérateur des intelligences » dépasse la raison dominée par la vue parce qu'il est phénomène visible et en même temps la démonstration de la substance invisible, Dieu. La raison, l'intelligence et la foi se trouvent ainsi liées dans les faits concrets. L'emploi de « vous » recourt également aux images dans la description qui suggère celle du *Génie du Christianisme* de Chateaubriand. C'est par son double appel à la raison et à la sensibilité que Lacordaire est arrivé à séduire ses contemporains à la fois rationnels et romantiques.

キーワード：ラコルデール　レトリック　理性　感性　視覚